

陳舜臣さんを語る会通信

NO.63

Apr. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年4月1日

連作短編集3冊『柊の館』『青春の烙印』『漢古印縁起』

【小説短編集2種類】各種週刊誌、月刊誌等に発表された、それぞれ生い立ちの異なる中・短篇が一冊の本にまとめられ、単行本として刊行されます。通常、「短編集」とはそういったもので、デビュー初期の陳舜臣さんには、この手の「短編集」が随分あります。

デビュー最初の十年間だけでも、単行本発行年順で、『方壺園』(1962)、『桃源遙かなり』(1965)、『紅蓮亭の狂女』(1968)、『青玉獅子香炉』(1969)、『幻の百花双瞳』(1969)、『銘のない墓標』(1969)、『異郷の檻のなか』(1971)、『夜の歯車』(1971)、『崑崙の河』(1971)、『六甲山心中』(1971)、『なにも見えない』(1971)、『南十字星を埋めろ』(1971)と十指にあまります。

ところで、同じように見える短編集でも、それら短編を括る大きな題名や、一つのテーマ、舞台、時代設定などのもとに執筆され、同じ雑誌に連載された「連作もの」もいくつかあります。でも、「連作もの」は意外と少なく、陳舜臣さんの全作品から拾っても、単行本発行年順で、『長安日記－賀望東事件録』(1973)、★『柊の館』(1973)、★『青春の烙印』(1975)、★『漢古印縁起』(1978)、『夏の海の水葬(文庫本題名は『神戸異人館事件帖』)』(1979) ぐらいです。本号では、★の3冊を取り上げました。(編集委員 橘雄三)



講談社文庫版表紙

【裏表紙キャッチコピー】

柊の樹に包まれ、神戸でも異彩を放つ「とんがり屋敷」は、イギリス系船会社の宿舍だった。そこに十七歳で勤め、多くの外人たちと共に青春の充実したときを過ごした日本女性。彼女が語る古き良き昔の恋や奇妙な殺人劇、それは時代、人種をこえた愛憎ドラマとして清新に今よみがえる。異色の構成による、連作推理小説。

【初出】

『婦人画報』

1971年8月号～72年10月号

※初出時の題名→単行本の題名

『柊の館』→『柊の館』

『神田希望館』→『青春の烙印』

『桜獅子名品帖』→『漢古印縁起』



徳間文庫版表紙

【裏表紙キャッチコピー】

1911年の辛亥革命で崩壊した中国封建王朝。だが人々の解放と新しい社会の構築には苦難の道が続いた。南方に孫文を中心とする革命政権があり、北方には北洋軍閥という保守頑迷な政権が存在していた。祖国の前途を憂い、革命に若い血をたぎらせる青年たち。1919年の五四運動で反日の波が最高潮に達した頃、東京神田に中国人留学生専門の下宿屋「希望館」があった。激動の歴史に翻弄された青春群像を描く。

【初出】『小説現代』

「遠い声が呼ぶ」 1973年4月号

「五尺六寸の影」 1973年8月号

「青春の烙印」 1973年12月号

「銃声に醒めた」 1974年4月号

「なつかしい男」 1974年8月号

「祖父の冒険物語」 1974年12月号



中公文庫版表紙

【裏表紙キャッチコピー】

蘇州唐寅の「日本早春図」、寧波の豪商范家に伝わる漢代古銅印をめぐる秘話、桃剣・李剣にまつわる話、古陶磁の破片をはめこんだ壁の謎、敦煌で見出された多聞天踏魔像、蘇州の艶絵「夜叉図」一ひたむきに古美術品を追う蒐集家が掘り当てた名品とその転変が秘める数奇な物語六話。

【初出】『小説現代』

「日本早春図」 1975年2月号

「漢古印縁起」 1975年5月号

「桃李の剣」 1975年8月号

「思い出の壁」 1976年1月号

「多聞天踏魔像」

1976年5月号

「夜叉歓喜変」 1976年8月号

『柊の館』舞台・登場人物・内容紹介ほか

《 1. 『柊の館』舞台・登場人物・内容紹介 》

舞台は、北野町にあるセブン・シーズ・ラインというイギリス系船会社の宿舎です。ここには、三百坪ほどの敷地に、代々の神戸支店副支配人の家族が住む通称「とんがり屋敷」と、独身寮である「ごみとり部屋」、それにメイド・ルームと台所を兼ねた平屋の日本家屋が並び、とんがり屋敷とごみとり部屋のあいだに、柊がずらりと植えられていました。



登場人物もそこに住む人たち中心です。この宿舎のコック(女中頭)杉浦富子が狂言回しを務めたり登場人物になったりしながら物語は進行します。もう一人、主要な役割を当てられているのが、劉珠芳^{シーフオン}というメイド(阿媽アマ)です。

『婦人画報』連載ということで、女性を中心人物に据えたのでしょうか？ 各話の内容は右の表の通り。

《 2. 時代背景並びに神戸のようす 》

杉浦富子は1925年17歳のとき故郷の五島を出、神戸に来てここに住み込み、メイドの仕事を始め、46年が過ぎました。

つまり、作中時間は1970年頃(陳舜臣さんの『柊の館』執筆時期)で、富子が神戸にやって来た当時、そしてそれから十年ほどの時代を回想するという形式になっています。

引用します。

ピーターがごみとり部屋の住人になったのは、たしか満州事変のころでした。

あのころ、神戸は大きく変ったのです。

それまでは、町のなかを汽車が走って、踏み切りがいたるところにあり、そこで長いあいだ待たされたものです。その国鉄―当時は省線(鉄道省の線路)―といっていましたが一が、高架になりました。東西に長い神戸の中心部を、延々と高架線をつくったわけです。(講談社文庫版 P. 159)

あたしがアシスタント・コックになった昭和十年は、満州事変も終って、大きな戦争はありませんでした。

そうそう、もう満州国というのができて、その年に、満州国の皇帝が日本に来たのです。皇帝が神戸の町を通るので、日の丸と満州国の小旗を子供たちに配って、それを振らせたことがあります。

(P. 191-92)

『柊の館』各話、題および内容

話数	題	内容
第一話	青い充実のとき	セブン・シーズ・ライン社の宿舎の近くに住むイギリス人青年が暴漢に襲われ重傷を負うという事件と、とんがり屋敷の落成記念パーティの会場で一人の医師が死体で発見されるという事件が起きます
第二話	夜の影	整形術と美容術を兼ねたような施術を商売にしているもぐりの医者が無惨な死に方をします
第三話	サキ・アパート	鈴木商店破綻一、二年のことです。サキ・アパートの経営者が事業に失敗、服毒自殺をします。少しおいて、アパートの経営者に金を貸していた高利貸が殺されます
第四話	六人の客	新任の、遊びの名人と言われる副支配人が語るユーモラスなおちの作品。舞台はロンドンの場末の安宿。逢引きに利用する男女の行為を六人の好き者がのぞき見るという場面設定
第五話	わがレンアイ	杉浦富子の恋。母が日本人のプレイ・ボーイとのできごと。スパイ・スリラー
第六話	ゴールデン・エイジ	劉珠芳の過去、人生が語られます
第七話	岩壁の話	珠芳の話の中、第一話の殺人事件が解決されるという展開でこの作品は終わります

《 3. 題名の『柊の館』を考える 》

とんがり屋敷にはたくさんの柊があったのですが、陳さんは、もっと抽象的な意味を持たせています。

「この柊をごらん」

柊の葉にはトゲらしいものがありますが、膚を刺されても、そんなに痛くありません。

うちの庭の柊も、なにやら垣のような恰好になっていますわね。そこは越えちゃいけないので、一種の境界です。垣越しに話し合えという関係よ。でもいざというとき、たとえば地震や火事がおこったら、柊の垣なんか踏み越えて、あっちへ行けますわ。わかりますか？ 通り抜けができるのです。

雇用関係は、柊の垣みたいに、通り抜けができるのです。それがはずれたなら、おたがい対等じゃありませんか？ (P. 190-91)



一九三五年、訪日した
溥儀(右)。左は昭和天皇。
「溥儀の没後50年写真集」
より

『青春の烙印』 舞台・登場人物・内容紹介ほか

《 1. 短編集、題の付け方 》



短編集の題の付け方には二種類あります。一つは、収録作品の主たる一作の題名を短編集の題にするもので、今一つは、収録作品とは別に、それらを含む題を新たに付けるものです。本号で取り上げた3冊の内、『青春の烙印』と『漢古印縁起』は前者で、『柊の館』は後者です。

ただ、『青春の烙印』と『漢古印縁起』も、初出連載時は、それぞれ、『神田希望館』、『桜獅子名品帖』でした。これは、著者の意図というより、出版社の販売戦略のような気がします。

《 2. 『希望館』は中国人留学生の避難港 》

第一話、「遠い声が呼ぶ」から引用します。

希望館が繁昌したのは、あるじの河田森吉が、あたたかいおやじであったからだ。異国に遊学する青年にとって、人間のあたたかさは、なによりの慰めである。

つぎに、河田の細君のまつが、沖縄出身のせい、食べものが中国人の口に合うのも一つの理由であったろう。

河田夫婦の娘友子も、女中の常子も、ひかえめで淳朴な性格であった。

一日になんとか侮蔑の視線を浴びたり、差別的な待遇を受けたりする中国人学生にとって、希望館は一つの避難港といえた。ここに辿りつく、ほっとするのである。（徳間文庫版 P. 10-11）

《 3. 時代背景、並びに中国人留学生の政治意識 》

引用します。

私が日本に留学したのは、五・四運動（一九一九年）の翌年のことである。日本の年号は大正九年であった。（p. 6）

当時の中国は、南方に孫文を中心とする革命政権があり、北方にいわゆる北洋軍閥という、救い難い保守頑迷の政権が存在していた。

留学生は出身地に関係なく、ほとんどが南方の革命政権びいきである。（p. 13）

そして日本では、1923年9月1日、関東大震災が起こり、『希望館』も倒壊します。しかし、より大きく、再建されます。

《 4. 「遠い声が呼ぶ」、「青春の烙印」 あらすじ 》

「遠い声が呼ぶ」 『希望館』の住人、「私」楊旭は、うなぎ屋『善助』の女中・富子に夢中になるが、袁岳年というライバルがいた。ところが、1923年9月、関東大震災が発生、袁岳年が遭難し、富子が失踪する。袁岳年は、北方軍閥のスパイの親玉と接触していると噂が絶えない人物だった。

その後、時代は日中戦争、戦後へと移り、舞台も中国、東南アジアと変りながら「私」の語りは続く。

最初の出来事から四十年、楊旭と富子は再会し、『希望館』での出来事がスリーパー仕立てで、疑惑を残しながらも明かされる。

「青春の烙印」 「私」唐元儒は、『希望館』の住人とはなったが、日本生まれの日本育ちであったから、「留学生」といえるか、自身、疑問に思っていた。唐元儒は、父が上海出身ということもあり、はっきり言えば、胡文媛という幹事の女性に惹かれ、「三江（江蘇、浙江、江西…）同郷会」の熱心なメンバーになった。

東京の繁華街で、ともに中華料理店を開く『金溪楼』の唐じいさんと向かいの『東華園』の阿欧ばあさんは、じつによく喧嘩をしてきた。そして、唐じいさんこと唐元儒は阿欧ばあさんと丁々発止のやりとりをしたあと、彼女とは似もつかぬ女性、四十五年前の胡文媛の面影をふと思い描くことがあった。

話は戻って、1926年、唐元儒は胡文媛を追って上海へ渡る。上海では、ギャング団「青幫」に近づく職業革命家胡文媛を慕う唐元儒にも危険が待っていた。ここで、1927年4月12日、蒋介石の上海クーデターについて詳細に描かれる。そんな政治状況のなか、唐元儒は捕らえられ、両肩に十文字の焼烙を押し当てられるが、辛うじて一命をとりとめる。これは、唐元儒にとって、青春の烙印ともなった。ところで、阿欧ばあさんは、どのように四十数年前の筋に絡んでいたのでしょうか。それは、読んでの楽しみです。



上海クーデター
処刑される共産黨員

toruhijino.hatenablog.jp より

『漢古印縁起』^{かんこいんえんぎ} 舞台・登場人物・内容紹介ほか

《 1. 陳さんの中国旅行（最初期） 》

『青春の烙印』続いて『漢古印縁起』執筆時から陳舜臣さんの中国旅行は始まります。下にあげた表の通りです。これらの旅行は、作品、特に『漢古印縁起』に反映されています。

陳舜臣さんの中国旅行（最初期）	
年月	旅 程
1972年 10月	初めての中国旅行。北京では、1953年、祖国建設の情熱に燃えて中国に渡った妹・妙玲に会う。西安へも
1973年 8~9月	家族4人(ご夫婦、立人さん、由果さん)の旅。この旅を機に中華人民共和国籍取得。西安、蘭州、ウルムチ、トルファンほか
1975年 8月	家族4人(ご夫婦、立人さん、由果さん)の敦煌への旅。北京空港から西安経由で蘭州へ。蘭州から夜行列車とジープで敦煌へ

《 2. 『漢古印縁起』紹介 》

『漢古印縁起』は連作6話から成っています。ところで、『小説現代』連載時は『桜獅子名品帖』という題でした。芦屋にある、江戸初期から続く造り酒屋で、銘酒「桜獅子」の醸造元桜井家の書画骨董のコレクションの流転が話の筋になっています。作者の分身で書画骨董について相当な知識のある「私」が、語り、狂言回しをつとめます。

「私」は、桜井家の息子・卓治が学友であったことから桜井家に入出入りするようになり、卓治の父・修蔵と、ときには卓治の兄・省治とも書画骨董について語り合う間柄となります。

収録6作(第1頁参照)は、いずれも舞台・時代背景など、大きく中国が絡んできます。

《 3. 「桃李の剣」、「多聞天踏魔像」 あらすじ 》

第三作「桃李の剣」 桜井家には、「桃李の剣」二振りの片方、「桃の剣」が所蔵されていた。これには、足利義満から義持にかけての時代の人、三代信国の銘があった。もちろん日本刀であるが、中国に渡ったことから「剣」と名づけられているのだ。

この「桃李の剣」の流転に先立ち、大英博物館収蔵「桃李剣叙」と『中国秘密社会史』に記述されている桃李剣の伝説が紹介される。

次に、桜井家のコレクションとなった経緯が語られる。「桃の剣」には、「桃剣及び李剣は、明の崇禎帝護身の剣なり」という書き出しの由来書、

「桃李剣記」がついていた。

このあと、崇禎帝及び皇太子と二人の公主の運命が語られ、李自成の北京入場、敗走など、明清交替期の政治状況に絡め、桃李剣の流転が詳述される。

それから二百数十年、西太后、袁世凱が登場する。この話の結末は…。読んでのお楽しみ。

第五作「多聞天踏魔像」 引用します。

去年の夏、私は敦煌そのほか中国の甘肅省各地を旅行することになり、そのまえに、桜井家を訪問した。桜井翁はただの鑑賞だけではなく、文献を渉猟し、専門家の教を乞うなど、研究のほうもなかなか深かったのである。私が訪ねたのも、敦煌を見学するについて、なにに参考になるようなことがきけるかもしれない、と期待したからだった。

(中公文庫版p. 227)

「おや、これはハンサムな多聞天ですね」

私は第一印象を口にした。

「クラーク・ゲブルに似ているでしょう」

と、桜井翁は言った。

右手の武器は三叉戟^{さんさげき}である、左手の宝塔は…。

「これをよくごらんになって、敦煌へ行かれたとき、はたしてこれが、敦煌のにおいをもっているかどうか、判断してください」 (p. 229-231)



より
www.famile-kazokusou.com
多聞天イメージ

《 4. 複数の作品で、同じ史実を扱う難しさ 》

「桃李の剣」における明清交替期の北京の政治状況、「多聞天踏魔像」での、敦煌文献の発見及び離散は作品の重要な要素となっている。ところで、明清交替期の北京の状況は、このあと、『風よ雲よ』でも詳述されるし、敦煌のことは、ほぼ同時期、『敦煌の旅』として刊行されている。史実をテーマとする作品を多く手掛ける作家にとって、おなじ食材で違った料理を作る、ということなのかもしれない。